慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『多元的統合感覚と生・美の諸相：人類学・美学の境域の地平』（7月30日 三田キャンパス東館6FG-SEC Lab)
Sub Title	Multi-sensory aesthetics and the cultural life of the senses : the sensory turn in anthropology
Author	三宅, 博子(Miyake, Hiroko)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2011
Jtitle	Newsletter Vol.17, (2011. 10) ,p.4- 4
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	哲学・文化人類学グループシンポジウム
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000017-0040

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

哲学・文化人類学グループシンポジウム

『多元的統合感覚と生・美の諸相：人類学・美学の境域の地平』

Multi-Sensory Aesthetics and the Cultural Life of the Senses: The Sensory Turn in Anthropology

（7月30日　三田キャンパス東館6FG-SEC Lab）

2011年7月30日に、三田キャンパス・東館にて「多元的統合感覚と生・美の諸相：人類学・美学の境域の地平」というタイトルでシンポジウムを開催した。文化人類学と美学の境域に位置するテーマである「感覚」の多元性を巡って、両分野から興味深い研究が発表された。

第一部「感覚の人類学」のセッションでは、まず拠点のチームリーダー宮坂敬造教授が、From Sensory Experience to Cultural Ritual： The Sensory Turn in Anthropology と題して問題提起を行った。文化人類学における言語への転回以後、重要な研究動向のひとつに感覚への転回がある。従来専ら生物学的機能として捉えられてきた感覚が、文化によって様々に異なる様式を持ち得ることを、呂律・香道等の例を挙げて述べた。

続いて、Concordia 大学（カナダ・モントリオール）の David Howes 教授が、複合的な感覚の美学について講演を行った。〈美学〉の語源は古代ギリシャの aesthesis に由来するが、近代的学問領域としての美学が成立したのは18世紀半ばのことである。カントの『判断力批判』以降の近代美学は、中立的で無関心的な美的判断によって、抽象的な形式のなかに純粋な美を観想するものとなった。それと同時に、絵画なら視覚、音楽なら聴覚といったように、ある芸術を鑑賞する際に用いられる感覚様式が単一化され、それ以外の感覚は排除されるようになった。しかしながら多くの非西洋社会では、美とは芸術領域ごとに分け隔てられたものではなく、日常生活や儀式の実践に埋め込まれたものとしてある。感覚もまた、儀式のような特定の目的のために特有の仕方で組み合わされる。Howes 教授はペルーの先住民族シピボ族に伝わる幾何学模様や、日本の香道を例に挙げ、感覚様式を横断するような美的実践について論じた。教授によれば、シピボ族の布や食器、顔面等に刻まれる幾何学模様は、単に抽象的な視覚認識にとどまらず、治療儀礼において煙草の煙や詠唱のメロディといった多感覚に渡る体験を結びつけ、健康＝美を快復する中心的役割を果たしている。最後に、このような例を詳細に検討することを通じて、美学が本来意味していた感覚の豊かさを取り戻すことの重要性を説いた。

これを受けて、指定討論者の岡崎彰教授（一橋大学・文化人類学）は、西洋近代の視覚中心主義がパノプティコン的なまなざしによる管理支配体制を構築してきたことを指摘した上で、オルタナティブとしての非西洋文化における多感覚性に目を向けるのみならず、西洋文化の内側から多感覚性を再構築するべきではないかという鋭い問いを投げかけた。

第二部「美学と人類学の交差点」と題したセッションでは、立命館大学衣笠総合研究機構ポストドクトラルフェローの加藤由希子氏が、美学の立場から、19世紀イギリスの美術批評家 John Ruskin の革新的な色彩理論を出発点に、クロスメディアとしての色彩について論じた。Ruskin は、絵画における色彩を単なる作品の一要素＝色素としてではなく、画家の生と密接に結びついた創造行為の美と捉えた。氏によれば、この実践としての色彩という考えは、アクション・ペインティングや共感覚、あるいは後期資本主義社会における色彩の氾濫と受容が示すように、多くの感覚をつなぐ役割を持っている。ここでは新印象派の画家 Georges Seurat の点描を取り上げ、作品として表現された色彩と、鑑賞者の網膜に反映する色覚、鑑賞者の心的活動とが相互作用するプロセスとして色彩を捉える見方を、神経心理学の知見を参照して示した。

次に、本拠点の島薗洋介研究員は、腎臓移植を受けた人達が非－自己の身体である腎臓からもたらされる身体感覚と対話しながら、自己の一部としてそれを受け入れていく経験について、フィールドワークで得たインタビューをもとに述べた。指定討論者の Howes 教授は、臓器移植という経験が複合的な感覚体験の契機となり得ることに強い関心を示された。

シンポジウム全体を通じて、人類学、美学の領域横断的な話題が提供され、大変拡がりのある議論となった。とりわけ、美が単なる抽象的な概念として存在するのではなく、人間の営みと共に変容しながら受け継がれるという共通認識のもとに、感覚によってもたらされる多様で豊かな生の様相を探究するという姿勢は、今後の学際的発展を期待させるものであった。　（三宅博子）

The international Symposium “Multi-Sensory Aesthetics and the Cultural Life of the Senses The Sensory Turn in Anthropology” was held on 30th July, 2011, with Professor David Hawes, and two more guest speakers. We had fruitful cross-disciplinary discussions from aesthetics and anthropology.